

2025 年夏 北東北・湯巡り、山巡り（個人山行）

（報告）赤澤 東洋

◎期日：2025 年 7 月 3 日（木）～11 日（金） 9 日間

◎メンバー：赤澤他 1 名（妻）

齢 80 を超え登り残した山の余りの多さに愕然とし、今は意識して未踏の山へと足を向けている。免許証は来年 7 月失効で、熟考重ねて更新は断念する事としたので運転もあと 1 年のみ、今年は未知の地、下北半島等北東北で湯巡り、山巡りと洒落込む事とした。1 昨年の北海道同様に盛岡まで新幹線を利用し、盛岡でレンタカーを借り北上する。

3 日（木）姫神山 1124m。大宮 6:57 発（こまち 1 号）⇒ 盛岡着 8:44

何と速いことか。1 日が有効的に使え、それが魅力である。レンタカーは乗り慣れたホンダ・フィット。ナビに従い 10:10 一本杉登山口着。わずか 26 歳で夭折の歌人石川啄木の故郷の山として夙に有名、中学生の頃ファンだった私にとって一度は訪ねてみたかった山。歩き出して間もなく樹林帯の中、ざんげ坂と称する丸太の階段が急で息が乱れ楽な山なんてないなとぼやく。

やがて尾根筋となり露岩帯を慎重に乗つ越すと巨岩累々とした頂上で地元厨川小学校 5 年生の子供達 30 数名と付き添いの先生方や保護者達の学校登山で満員だった。生憎にも天気は曇り空で時々薄日さすものの期待していた岩手山や八幡平等の眺望は得られず、梅雨時の今、降られなかっただけでもまあ良しとする。



学校登山で賑やかな姫神山山頂

啄木歌集「一握の砂」から私の好む 2 句

やはらかに 柳あおめる 北上の 岸边目にみゆ 泣けとごとくに
はたらけど はたらけどなお わがくらし 楽にならざり じっと手をみる

《コースタイム》

登山口 10:20 ⇒ 12:45 姫神山頂上 13:00 ⇒ 14:20 登山口下山

下山後は岩手山焼走り国際交流村へ移動。岩手山を裏側より見上げるキャンプ村でテント泊としたがこの時期はまだシーズン前のように広いサイトにテントは私たちだけ、なんか寂しく集団で纏わりつく羽アリが鬱陶しい。

湯巡り：焼走り温泉・無色透明アルカリ単純泉「美肌の湯」大浴場 評価 B

4日（金）八幡平 1613m。07年8月H書房M社長に誘われ葛根田川遡行を目指すも豪雨の為断念、転進して以来だから2度目になる。山名に殆ど関心ない相棒でもドラゴンアイで知られる八幡平は知っており、行けるものなら行ってみたいという事でスケジュールに組み込む。4時起床、ガスっていて今にも降り出しそうな空模様。羽アリ（後にヌカカと判明）の集団に襲撃され外に出るにも一苦労する。ナビに導かれ八幡平アスピーテラインから岩手・秋田の県境見返峠レストハウスを目指したが、濃霧は深まるばかりで標高があがるにつれ風が強くなり時には突風にあおられハンドルが持っていかれそうになる程で意気消沈。6時半に着いたレストハウスは9時オープンとの事で施錠されトイレも使えず、広い駐車場は1台の車もなくアリヤリヤのりや、山は早出・早着が基本なのにとブツブツ文句。濃霧と強風の中、車の中でふて寝するしかなかった。8時過ぎになるとポチポチと停車する車も増え、レストハウスの従業員の皆さんも動き出し、トイレを済ませ、荒天の中、雨具で完全装備し先行する数名の後を追う。八幡沼を経て源太森まで行くつもりだったが、生憎の天気、何も見えない山頂展望台からは鏡沼経由で早々と車へ戻る。鏡沼では少し視界が開け、雪が残っていてドラゴンアイの残滓にその光景を想像する事が出来た。



八幡平山頂

《コースタイム》

レストハウス 9:20 ⇒ 9:45 山頂展望台 9:50 ⇒ 10:10 登山口

下山後は後生掛温泉の火山風呂を愉しみ、自然研究路の地獄巡りで噴気孔や泥火山に地球の息吹を感じ、焼走キャンプ場に戻る。焼走りとは浅間山の鬼押し出しと同義語、岩手山噴火で流れたマグマが冷えた溶岩流の事で巡回路も整備されている。因みにアスピーテラインのASPITEはドイツ語で楯上火山（火山噴火で出来た大地）という意味でその代表例がハワイのマウナケアである由。

湯巡り：後生掛温泉・単純硫泉 泥湯、箱蒸風呂等7つの湯 評価 A+

5日（土）釜臥山 878m。雨が予想されテントを撤収し車中泊したが、夜中降雨あり正解だった。4時起床。雨は上がっており当初の予定通り七時雨山・田代平登山口に着いたが、ガスっていて山頂は黒雲の中、今にも降り出しそうな天気。急遽予定変更して下北半島・縫道石山へ向かったが、ここも同じような空模様でテンションが上がらず、ちょっと手抜きになるが、今回はピークハント



釜臥山頂上レーダードーム

に固執し頂上直下まで車が利用できる下北半島最高峰の釜臥山へと転進する。本来ならスキー場リフト乗り場から2時間余歩いて登らねばまともな山やとは云えないところだが、そこは車の移動で草臥れた老兵、楽な方へと逃げ、車で行ける観光展望台から上り20分程で航空自衛隊のレーダー基地のある山頂に着く。この展望台からの夜景は東北随一で「夜のアゲハチョウ」と称されている由。下山後、恐山を経由し薬研温泉野営場に入る。土曜日の為か、私達のほか車12台、バイク1台と賑わっていてキャンプ場らしい雰囲気は一安心。

湯巡り：奥薬研温泉かっぱの湯・無色弱アルカリ単純泉露天風呂のみ 評価 A-

6日(日) 大尽山 828m。子連れクマと遭遇。イタコと呼ばれる霊媒師が死者の魂を呼び寄せを行うことで知られる霊場恐山からカルデラ湖の宇曽利湖を隔てて対岸に聳える大尽山は同じカルデラ湖の赤城山・大沼の黒檜山や榛名湖の榛名富士に似ていて一度行ってみたかった山だ。湖畔からの標高差は黒檜山 517m、榛名富士 307m に比し、こちらは 619m、より登り甲斐のある山と言えよう。天気はますます、湖畔の太鼓橋から望む三角錐の大尽山はなかなか格好良く意欲掻き立てられる。日曜日なので人出多いかと思ったが登山口の駐車場は私達のみで拍子抜けの感。

登山口に設けられたポストに入山届を出し、宇曽利湖畔に沿って設けられた東北自然歩道へと踏み込む。青森ヒバやブナの豊かな樹林帯の中、平坦で歩き易いがしばしば小さな流れを渡らねばならず、下を見て歩いていたら突然後方で「ギャーオー」と獣の叫び声、ついぞ聞いたこともない大絶叫に腰を抜かすほどにびっくりして振り返ると、1頭のクマがこちらを睨んでいる。私は全く気がつかなかったが、3ヶ所程後ろから付いてきた妻は自然歩道から2ヶ所程湖畔側に入った立木に子熊が登りだし、私に気が付いた母グマが子熊の足を引っ張り、不意を突かれて下に落ちた子熊の「かあちゃん、ナニすんだよ!」とばかりにあげた断末魔の絶叫らしい。とすればわずか2ヶ所ばかりの至近距離ですれ違っていた事になりニアミスもいいところ、妻は寸前に気がついたが、母グマが背中を見



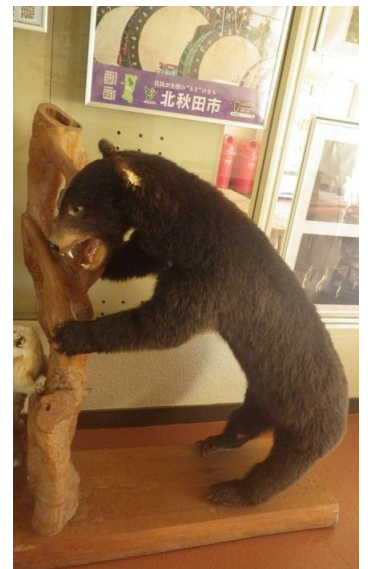
太鼓橋より大尽山



大尽山入口

ているので気づかぬ間にすっと通り抜けようと思い声をかけなかったという。まあフリーズ状態で固まってしまう声だす余裕等なかったのだろう。下に落ちた子熊は茂った下草に遮られ姿は見えず、こちらを睨む母グマとの距離は15ヶ所あるかないか、横向きで半開きの赤い口はワイルドでこりゃヤバイと思ったが、意外に冷静でパッと考えたのは「写真撮らなきゃ、こんな場面は滅多にないぞ」だった。が、それは即座に却下、見た目体長1.2ヶ所、体重50~60kg、彼らは時速40~50kmで走るという。こちらはせいぜい時速5~6km、背中を見せて逃げてても無駄だ。もし襲ってきたらどうしよう。10年位前、群馬県で渓流釣りをしていた空手有段者がクマと格闘、繰り出すパンチは糠に釘で全然利かず人差し指と中指揃えて目潰しかけて撃退したというニュースを視たことがあるが、こちらの武器は華奢なストック1本だけ、これを振り回しても所詮螳螂

の斧だろうが、噛みつこうと大きな口を開けてきたら口の中に突っ込んでやればいいかもと考えながら刺激しないように目は合わさず後ろ向きで静かに後ずさりして現場を離脱した。出会い頭が危険、特に子連れに要注意とされており今回は温厚なクマさんでホント良かったと思う。それにしても直前まで全く気が付かなかったのはドジで、それはクマさんにも云える事で最近のクマは野性味薄れ聴覚、嗅覚等感性は鈍化しているのだろうか。熊鈴はザックに取りつけていたが、平坦な登山路の為鳴っていなかったかもしれないにしても、クマもドジだと思う。会う前に気づいていれば退却していたのだが、しばらくは引き返せないので予定通り山頂まで登ったが、ガスっていて眺望ゼロ。下山途中、ソロ男性が登ってきたので、クマは立ち去ったものと安心とホッと山頂へ戻った。



ツキノワグマ剥製 対峙したクマはこれより一回り以上大きく、このように横向きで切り株に前足を置き赤い口を半開きにして顔をこちらに向けて睨んでいた。

ここでざれ歌一句

ウソリ湖で クマの親子と 鉢合わせ ソロリソロリと 我れ後ずさり

《コースタイム》

駐車場 6:00 ⇒ 9:30 大尽山 9:35 ⇒ 12:05 駐車場下山

下山後は恐山菩提寺を訪ね境内散策、境内の温泉に浸かり、薬研野営場に戻った

湯巡り：恐山温泉薬師の湯・ナトリウム硫黄泉 白濁 狭いが味あり 評価 A

7日(月) 縫道石山 626m。「ぬいどういしやま」と聞いてそれがどこにあるか知る人は余ほどの「通」だ。

「求道の越境者・河口慧海」の著者根深誠の「山の人生・マタギの村から」NHK ブックス 1991・10 刊にて紹介された事で世に知られるようになった下北半島の特異な岩山であり、著者は1969年明治大学山岳部時代に南東壁初登攀している。麓の畑集落は知る人ぞ知るマタギの里、マタギは秋田-阿仁地区が有名だが、阿仁マタギとの関連性は薄く独自の文化を伝承、引き継いでいると云う。

恐山から続く周辺は昔からクマの多いことで知られ体長 2・3 尺、体重 150 kg クラスの大グマも何度か仕留められてきたと云う。昨日の大尽山むべなるかな。

2 日前に下見した時よりも悪い空模様、登山口には熊鈴が準備されており、手持ちの鈴より大きく効果ありそうなのでお借りし入山の記帳をする。しばらく杉林が続くジメジメして滑り易い暗い登山路、今にもクマが飛び出してきそうで気味が悪い。頂上へ行ってもこの様子では何も見えないに違いないが、今回はピークハントに拘ることにする。頂上直下の岩場は濡れていて慎重に通過、大きな岩がごろつく頂上は予想通りガスっていて早々と退散したのだった。伊豆・城山南壁をもっと鋭く天に突き上げたような岩壁を写真に撮りたかったのでウーン残念。

《コースタイム》

登山口 7:30 ⇒ 9:15 山頂 9:20 ⇒ 10:30 登山口下山

下山後は景勝地仏ヶ浦から大間回りで酸ヶ湯温泉に向かった。25 年ぶり 2 度目の酸ヶ湯温泉、相変わらず人が多い。宿泊費は前回 12000 円、今回 15100 円

湯巡り：酸性硫黄泉・ヒバ千人風呂 混浴だが女性の水着は興ざめ 評価 A-

8日(火) 八甲田大岳 1585m これまでのうっ憤晴らす好天、途中までは高田大岳へ登った25年前と同じルート、仙人岱の清水の冷たさはよく覚えている。昔は木柙に囲まれ蓋もあったが、今は蓋はないものの相変わらず美味しい。山の清水我がベスト3に入る。頂上からは高田大岳が大きくその右手に八幡平や岩手山等、目を転じれば岩木山と懐かしき山々、山はこれなくてはとつくづく思う。当初はそのまま来た道に戻るつもりだったが、好天に誘われ毛無岱湿原経由で酸ヶ湯温泉に戻った。



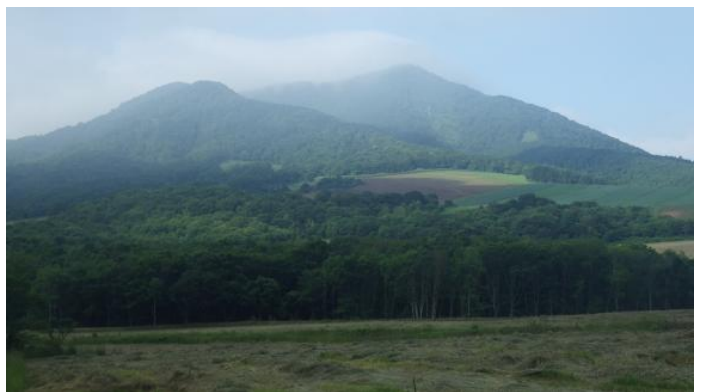
毛無岱より八甲田大岳

《コースタイム》

登山口 8:00⇒9:55 仙人岱清水 10:00⇒11:10 八甲田大岳 11:20⇒13:20 下山

下山後は奥入瀬溪谷沿いに十和田湖畔の生出キャンプ場へ出てテント泊。シーズン前なのか他には3組あるのみ、売店もなくシャワーも使えず侘しい野営場。

9日(水) 七時雨山(ななしぐれやま) 1063m 4日前登山口まで行きながら悪天候に阻まれ下北半島に転進したリベンジだ。この山に拘るのは、以前バブル華やかなりし頃、某大手不動産会社のリゾート開発計画に反対する「七時雨の風と語らう会」を92年5月「山の本」を創刊した白山書房が側面から応援していたそうで、後日「山の本」への何回かの寄稿で知遇を得た編集委員の皆さんから、この山の素晴らしさを散々聞かされてきたからである。私が「山の本」に寄稿を始めたのは97年からで、その頃にはバブル弾けて開発計画は中止になり反対集会のコンサート等も開かれなくなり、訪ねる機会もなく今日に至ったという次第。登山口のある駐車場は数十台停車のスペースありトイレも設置され広大な田代平高原が見渡せ、ここにゴルフ場やスキー場、高級別荘地等出来なくて本当に良かったなあとと思う。七時雨山の山頂付近だけ白い雲が掛かっているのが気かりだが天気はますます勇躍放牧地へと踏み出した。なだらかに登る草原は放牧地という事だが、牛の姿はなくしばらく行くと開墾され一面高原野菜が植えられているのが見渡せた。三合目を過ぎ樹林帯に入りようやく登山道らしくなったが、ずっと急登はなく老兵向きの山を実感した。2時間程で着いた南峰は生憎ガスっていて何も見えず、虫がまとわりつき鬱陶しく不快なので早々と退散してきた。今回はこういうケースが多いがこれはまあ想定内、覚悟の上の日程なのではない。道中誰にも会わず静かな七時雨山、この山の良さを知るにはいささか消化不良で、登れただけでまあヨシとしよう。



雲かかる七時雨山

《コースタイム》

登山口 7:10 ⇒ 9:15 七時雨山・南峰 9:25 ⇒ 10:50 登山口下山

下山後は東北高速道を大館北 IC まで戻り森吉山へ向かった。山麓の阿仁で北秋田市観光課に立ち寄り、宿の紹介を頼むも森吉山荘は廃業、打当温泉は団体予約で満杯と埒あかず、結局、今日もテント泊となる。山道走り「妖精の森・キャンプ場」へ。ここもガラガラで私達だけの寂しい野営場、本日も温泉もシャワーも無し。

10 日（木）森吉山 1454m 秋田県に赴任していた中道宏会員ご推奨の山、今回一番の目玉である。キャンプ場の先にある「こめつが山荘」からも登山道が開かれているが、こちらからだと頂上までの標高差 660m、上り 4 時間以上かかりそうだが、阿仁ゴンドラを使えば山頂駅よりの標高差 300m と半分以下、老兵隊は迷う事なくゴンドラ派となる。全長 3.5 km と長い距離、ブナ林の山麓からダケカンバへと変わる植生、車窓から山頂を眺める事を期待したが、地形的に無理のようでそこは残念しごく。土地勘ゼロ、山も深く車を運転中それらしき山に目を凝らしたが視ることが出来ず、ゴンドラに乗れば見えるかと思っていたのだが……。シャイな森吉山。

天気はますます、人出もますます、ダケカンバとチシマザサの続く登山路には木道が敷設され、歩き易い。30 分程で石の積まれた石森となり「こめつが山荘」方面への分岐点で、漸く森吉山の全貌が露わになる。ここからは小さな池を含めた草原となり、木道の左右にはニッコウキスゲが咲き乱れシラネアオイ、イワカガミ、綿毛のチングルマ等々を目にオオシラビソに囲まれた阿仁避難小屋、

稚児平を経て森吉山の標柱の立つ頂上に出た。雲が多く、遠景は霞が掛かり、期待した鳥海山や岩木山は同定できず、わずかに手じかの秋田駒、岩手山が確認出来ただけだった。この山は急登もなくお花も沢山でルートル向けだが、もう一つの売りである展望を望むなら晩秋から初冬にかけて、樹氷の時期も良さそうだが……。チト遠いが難点。



石森より森吉山

《コースタイム》

ゴンドラ山頂駅 9:05 ⇒ 10:35 森吉山 10:45 ⇒ 11:45 ゴンドラ駅

下山後は打当温泉マタギの湯で入浴、マタギ資料館、くまぐま園を見学しマタギやクマさんの生態を学ぶ。今宵も妖精野営場は私達だけ、管理人も不在との事で、夜露防止の為テントは炊事場に隣接の板張りの休憩舎内に張り快適。

湯巡り：打当温泉マタギの湯 ナトリウム塩化物泉 無色透明 熱湯 評価 A

11 日（金）小白森山 1144m 最終日。乳頭山を予定したが人気コースは崩壊して通行止め、他のルートも荒れていて時間がかかるとの地元情報あり、好天なので鶴の湯温泉から小白森山へ転進する。そんな事もあるかと地図を用意しておいて正解。頂上は湿原広がり、苗場山や会津田代山の超小型版だった。

《コースタイム》

乳頭温泉鶴の湯登山口 8：15⇒10：30 小白森山 10：35⇒11：55 鶴の湯下山

下山後は鶴の湯で汗を流し、盛岡へ向かい無事レンタカーを返却。

総評：運転した車の総距離 1492 km、登った山 9 山、テント 7 泊、温泉宿 1 泊、クマとの遭遇も何とか回避、不平も言わず付いてきた相棒に感謝、総じてまずは上出来で、お互いよく頑張ったものと思い大満足だが、お天気悪く満足度は 80 点という所。

盛岡 16：17（はやぶさ 60 号）⇒ 大宮着 18：07 にて無事帰宅

湯巡り：鶴の湯 白湯・黒湯等 4 種類の源泉 白濁した混浴露天風呂 評価 A+